聖夜の贈物

ピロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の贈物

【コード】

N0705M

【作者名】

ピロ

【あらすじ】

リコリスとシオンは亡くなった人からの贈り物を現世に届けるのが仕事。今回はクリスマスに届けてほしいという依頼を引き受ける。

街を歩けば、

何処からともなく聞こえる楽しげな曲
目に飛び込んでくるイルミネーション
お店には関連の商品がずらりと並び

世の中はすでにクリスマス一色でお祭り騒ぎになっている。

そんな賑やかな街中を、陰気な溜め息を吐いて1人の少女が歩いて
いた。

年の頃は9、10歳程で、緩くウェーブのかかった白髪のようなプ
ラチナの髪に、パツチリとしたパステルブルーの瞳、頬はやや紅潮
し、桜色の唇を不機嫌に尖らせている。着ている服は、一言で言え
ばロリータファッション。全体を薄いピンクと白で纏めている為か、
少女によく似合っていた。

そんな少女が街中を1人ズンズンと進んでいると、当たり前のよう
に擦れ違う人々は皆振り返った。始めはその容姿に、次には少女が
持っている物に、好奇の視線が集まる。

少女が持っているのは、真っ白な兎のぬいぐるみ。黒い燕尾服を着
て、シルクハットとステッキを片手に持っているその兎は、一瞬人
々にアリスの時計兎を思わせる。

少女は、人々の視線など気にする事もなく歩き、視界の片隅に入った公園に入った。噴水をよく見えるベンチに座り、深々と溜め息を吐く。

「…あーあ、やってらんないわ。…まったく、どうして私なのかしら」

少女の物言いや言動は、9、10歳の少女には似つかわしくないようなものだった。近くに居た人は、少女を不思議そうに見るが、公園内にいる人はカップルや親子が多く、クリスマスで浮き足立っている為に、あまり気にする風でもない。

少女が再び溜め息を吐くと、隣に置かれた兎のぬいぐるみが少し動いたように見えた。

「……仕方ないでしょ？勝手に出ちゃうんだから。大体ねえ、こんなに人がいる中から、」

誰かと会話しているようにそう言った少女の周りには、すでに人はいなくなっていて、隣に兎のぬいぐるみがあるだけ。

「…はいはい。分かったから少し黙って……え？」

少女は何かに驚き、慌てて噴水を見た。正確には、噴水の向こう側に立っていた男性を、だが。ぼさぼさ頭に黒縁の眼鏡、よれよれのコートを着て、肩から黒い斜め掛けバッグを掛けている。

少女は、男性を見て悪戯を思いついた子供のように楽しそうに笑った。

「…見つけた」

少女はそう言うとベンチから立ち上がり、自分の背丈の半分程の大きさはある兎を抱えた。少女はスタスタとぼさぼさ頭の男性に近づく。

男性は、少女が自分の方に歩いて来ている事を悟ると、少女とは反対の公園の出入り口の方へ歩き出す。公園から出ると、男性は逃げるように駆け出した。

「あ…ッ！」

男性が駆け出したのを見て、少女は小さく叫ぶと軽く舌打ちをして後を追いつけるように駆け出した。

しかし、9、10歳の足では男性に近づくどころか、次第に放されていく。

少女は一度足を止めて息を整えながら、周りを見回した。

少女がいる場所はあまり高い建物がない。顔を正面に向けると、男性が路地に入って行くのが見えた。

「…もう、何で逃げるのかしら」

少女はぶつぶつ言いながら、近くにあった建物に入った。そこが見た中で一番高かったのだ。

屋上まで一気に駆け上がり、ドアを開けて外に出る。安全の為に設置してあるフェンスに近付くと、手を掛けて攀登り始める。

片手で抱えていた兎は、何故か自力で少女にしがみついている。

「…つと」

フェンスを登りきり、フェンスの向こう側に降りる。少女は足場のあるギリギリまで歩くと、身を乗り出すように辺りを見回した。風でスカートが翻り、髪が靡いてキラキラと光る。

「…あ、居た」

そう言った少女の瞳は、パステルブルーから藍色に変わっていた。ぱちりと一度瞬きをすると、パステルブルーに戻ったが。

「…あんまり目立つなって言われてるけど」

少女は呟くと兎を抱え直し、一步踏み出す。足場のない筈の場所を、少女は悠々と歩いていく。

暫く歩くと、数メートル前に先程から少女が追いついている男性がいた。男性は少女の方に背を向けているので、自分が見つかった事に気付いていない。

少女は少し助走をつけると、軽く足元を蹴り飛び上がる。空中でぐるりと回転して、男性の目の前にふわりと着地する。

「な…！？」

「初めまして。篠川柊也さん？」

少女はにこりと笑って、スカートの端を摘み軽く膝を曲げて挨拶を

した。

優雅にお辞儀をする少女の手には、先程まで抱えていた兎のぬいぐるみはなかった。

少女が現れた事に驚いた男性・柊也は、逃げようと後ろを振り返り足を止める。そこにいたのは、兎のぬいぐるみ…ではなく、燕尾服に身を包んだ長身の男性。

「…もう少し優しく扱ってほしいものですね、リコリス？」

「文句は後で聞いわ。今はそれ所じゃないでしょ？…シオン、まさか落としたなんて事」

「まさか。そんな馬鹿な事しませんよ」

シオンと呼ばれた長身の男性は服の埃をはたきながら言い、リコリスと呼ばれた少女は呆れたように言った。

2人の会話についていけず、柊也は慌てて口を挟んだ。

「…あの、あなた達は一体…？」

柊也の言葉に、リコリスとシオンは顔を見合わせた。

自分達がまともな自己紹介すらしていない事に気付いて、2人は姿勢を正す。

「…申し遅れました。私リコリスと申します。そっちの者はシオン。ある方から貴方への預かり物を持って来ました」

ぺこり、とりコリスは再びお辞儀をし、シオンも柊也の後ろで丁寧にお辞儀をした。

「…預かり、物？」

柊也が怪訝そうな顔でリコリスを見るが、全く気にしていない様子でリコリスは続ける。

「はい。その方は、生前貴方と近しい間柄だったとか」

リコリスが話している間に、柊也の横にはシオンがいた。その手には、一通の封筒と包み。

「…これ…ッ！」

封筒と包みに書いてあった字に、柊也は見覚えがあった。忘れられる筈のない、癖のある筆跡。

「桐島飛鳥さんからです」

シオンの低く優しい声に、柊也は恐る恐る封筒と包みに手を伸ばす。柊也の手に封筒と包みが渡ると、リコリスとシオンは恭しくお辞儀をして消えた。

残された柊也は、それを気に止める事もなく手元にあるものを見つめる。何度か深呼吸した後、ゆっくりと封筒を開けた。

『 D E A R 柊也

貴方がこれを読んでいるという事は、あの2人がちゃんと届けてくれたんだね。よかった。

私ね、柊也に逢えて幸せだったよ。何も後悔はしてない。あ、でも

一つだけ…。柊也を置いていっちゃった、それだけ後悔してる。

きつと、貴方みたいに不器用でヘタレな人にも、これから先素敵な人に巡り逢えるから、

…だから、いつまでもうじうじ俯かないで。貴方の泣いた顔なんて、見たくない。

私の事は…早く忘れて、新しい恋を見つけて下さい。私は、貴方の幸せを祈ってます。

FROM 飛鳥

柊也は、何も言えなかった。嬉しいんだが、哀しいんだが、淋しいんだが分からない。ただ、心が軋んだ。

震える手で、包みに手を伸ばして開けていく。出てきたのは、毛糸のマフラー。

『寒がりな柊也へ』

小さなメッセージカードに書かれたそれは、飛鳥の字。夕日色とオフホワイトのストライプのマフラーは、手編みなのか所々編み目が粗い。

「……………つすれる、訳…ッ」

この世からいなくなってしまう時は、自分もいなくなりたいと思った。でも、キミがそれを望んでない事は分かっていたから。

「…ねえ、シオン？」

「何でしょう？」

「私達がしている事は、意味があるのかしら？」

リコリスとシオンは、ビルの屋上に腰掛けていた。

リコリスの姿は、先程までとは少し違う。白いドレスに身を包んだ、少女とは言い難い大人の女性の姿。

「…さあ？どうでしょうね。私達は罪人ですから、少しは軽くなるんじゃないですか？」

「そう」

風に靡く髪をキラキラと輝かせて、リコリスはふんわりと笑った。

「…クリスマスの仕事も、悪くない…かしらね」

「そうですね」

寄り添って微笑む2人は、人知れず消えた。

FIN . . .

リコリスとシオンはどちらも「追憶」という花言葉を持った花の名前です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0705m/>

聖夜の贈物

2011年10月7日10時29分発行